様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2013
課題番号：２４７２００７８

研究課題名（和文）戦場の〈肉弾〉―日露戦争を中心とした近代日本における戦死表象の研究

研究課題名（英文）Human Bullets: A study of the representations of the war dead in modern Japan

研究代表者
向後　恵里子（Kogo, Eriko）

早稲田大学・文学学術院・助教

研究者番号：８０４５４０１５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円、（間接経費）　　600,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、近代日本における戦死の表象について、〈肉弾〉という身体の破壊表現に注目し、視覚表象とメディア言説とを対象とした資料調査をもとに実証的に考察するものである。
　調査の成果から、英雄的かつ悲劇的な物語への共感とともに、戦死者たちが美しく描写された様相が明らかとなった。この共感の背景には、大量の犠牲をうむ戦場のリアリティをとらえんとする姿勢が見られる。この戦死表象は、2つの言説から生じている。熱狂される武士の戦の物語と、新しいエネルギーとテクノロジーとを操作し得る能力を裏付ける近代戦の描写である。血と肉に粉砕される兵士の身体は、この2つの言説の交点に、近代的国民の象徴として横たわっている。

研究成果の概要（英文）：　This study examines the representations of the war dead in modern Japan, focusing on the crushed bodies of the Human Bullets (Niku-Dan). The research objects of this study are visual representations and media discourses.
　This study deepens our understanding of how and why these representations of the war dead were so beautifully described, generating widely shared empathy for their heroic and tragic stories. In the background, beneath the level of empathy, some people attempted to comprehend the reality of battles with massive casualties. These descriptions of death come from two sources. The first is the vision of the battle of the Bushi or Samurai (feudal warriors), a narrative that the Japanese find exciting. The second is the representation of modern arms and their new power, depicting the Japanese people as capable of managing the new energy of modern technology. The crushed bodies lie at the intersection of these two sources, as a symbol of the modern nation.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：肉弾　日露戦争　視覚文化　表象文化　戦死表象　イメージ　身体　戦時メディア

１．研究開始当初の背景

代表者は、修士論文より日露戦争の視覚イメージ研究を行ってきた。科学研究費助成課題である「日露戦争期における視覚イメージ研究」（若手研究（スタートアップ）・課題番号 19820030・H19-20 年度）および「日露戦争の錦絵と写真―1900 年代における戦争の表象―」（若手研究（B）・課題番号 21720058・H21-22 年度）において、芸術作品から複製印刷にいたる多様なメディアについての調査を進めるなかで、血と肉の飛散る戦死の描写にくり返し遭遇した。

こうした身体の破壊をともなう戦死の表象は、〈肉弾〉という言葉で表現することができる。この言葉は桜井忠温のベストセラー戦記『肉弾』（1906 年）によってひろまったが、日露戦争期の新聞雑誌従軍記等のメディアを概観すると、自らの身を敵陣にさらし戦死をとげる将卒の描写が広範囲に確認できる。しかも、そうした描写は悲惨なものであるが、同時にきわめて崇高なものとして描かれていることが多い。こうした観察から、その戦死の描写という観点から、近代日本における戦争の表象文化を考察するというテーマがうかびあがってきた。

２．研究の目的

こうした背景から、身体の破壊をともなう〈肉弾〉イメージを、近代日本の戦争表象に共通のモチーフとして仮設し、戊辰戦争から太平洋戦争までを比較、近代日本の戦争において戦死の表象が果たした意義を考察することを目的として本研究は開始された。

調査にあたっては、これまでほとんど体系的には考察されてこなかった〈肉弾〉表象について、視覚資料とメディア言説の双方から資料を発掘することを当初の課題とした。さらに、その調査結果をふまえながら、最終的には以下の研究成果を結びつけながら、近代日本における戦死の表象について新しい視座をもたらすことを目的としてすすめられた。

３．研究の方法

本研究は、身体の破壊をともなう〈肉弾〉として描かれる日露戦争の戦死表象を、多種のメディアにわたって調査、その様相を明らかにし、他の様々な戦争における戦死表象と比較したうえで、その意義を考察するものである。応募者のこれまでの日露戦争の表象についての研究成果を直接的に引き継ぎながら、より具体的な主題について発展させ、戦死表象にまつわる先行研究を参照しながら、領域横断的な考察をこころみることとなった。

したがって、研究の柱となったのは、日露戦争を中心とした近代日本の戦死表象の広範囲な資料調査と、その結果をふまえた比較ならびに実証的考察である。調査の対象は、視覚資料と文献資料の双方である。これまでの視覚イメージ研究の成果を反映しつつ、報道、文学を問わず、また様々な発話を含めた言語表象全般を言説としてとらえ、日露戦争表象の文化史として叙述することをこころがけた。

調査をはじめるにあたって、作品としての『肉弾』や、軍神をはじめとした日露戦争の有名な戦死についての研究は重ねられているが、日露戦争における戦死の表象を全体的にながめるものは少なく、また文献資料と視覚資料との双方を視野におさめた調査も不十分であった。実際、〈肉弾〉の様相は決して一様ではなく、誰がいつどのように戦死したと表象されたのか、その表現方法や受容の様相、またその意義について、基礎調査と分析が必要となった。

本研究ではこうした現状をふまえ、まず、日露戦争の戦死表象を広範囲のメディアにわたって精査し、文献資料・視覚資料双方からその様相を明らかにしようとこころみた。さらに、日本近代の他の戦争における戦死表象、歴史上の戦死表象、海外の戦死表象との比較を行った。

４．研究成果

（1）研究の主な成果

本調査では、身体の描写如何にかかわらず、近代日本における戦死の表象を概観し、また古今東西の戦争のそれと比較考察した。その結果、幕末期からの錦絵に顕著に見られる血を流し肉の飛ぶ描写と、19 世紀西洋の戦争画の基本である血の流れない描写とが、近代日本の戦争表象において交錯している様相があらためて明らかとなった。それは時間の経過にしたがって単線的にうつりかわっていたわけではなく、技術とメディアと思想が相関し、また戦争の性格および鑑賞者・読者の趣味が変容してゆくなかで、複雑な様相を見せている。どのような瀕死の身体描写が真であり善きものであり美しいのかという問いは、兵士の死に際して必ず逃れ得ないものとしてつきつけられる。

とくに日露戦争に際しては、1904 年の開戦から 1905 年の終戦・凱旋、そして戦後経営が取りざたされることとなる数年間のあいだに、兵士の死をめぐる状況が大きくゆれ動いた。これまで経験したことのない兵士の大量死が生じ、またひろがるマス・メディア網が、挙国一致を叫ぶ声のなかで、“われらが”兵士の死を伝えることとなったのである。以下、日露戦争期における〈肉弾〉について、その具体的な様相をとりあげる。

（2）日露戦争における〈肉弾〉

①　肉片の軍神

日露戦争期の新聞雑誌における戦争報道を概観すると、自らの身を敵陣にさらす将卒の描写が広範囲に確認できる。そうした場面では、血しぶきがあがり肉片が飛ぶ激しい戦死の様子が、「忠烈無比」として賞揚される

こととなる。
　日露戦争の描写を牽引する戦死の描写のモデルケースとなっていったと考えられるのは、旅順口閉塞作戦の一部隊を率いた海軍少佐広瀬武夫の死である。軍神とは、近代日本において幾度か設けられた軍人の尊称で、名誉の死を遂げた選ばれた兵卒に与えられる。広瀬武夫はその最初の人物である。
　廣瀬は、未明に行われた閉塞作戦において、部下を三度探しに戻り、あきらめて帰還をはじめた刹那、砲弾の直撃を受けて海中に没したと伝えられる。その場に居合わせた栗田大機関士は、「広瀬中佐戦死の模様の如きも慥かに見届けたる者とては誰一人も無之候得共拙者の軍帽軍服及其他傍（かたへ）に居合せたる下士卒の被服に濯がれたる脳漿肉片及び鮮血等によりて正しく頭部を撃ちたるものなる事を推定したるに止まる」（栗田大機関士「広瀬中佐戦死の実況を記せる栗田大機関士の書簡」『東京朝日新聞』1904 年 4 月 15 日）と報告した。示唆的なのは、廣瀬の死を誰もはっきりとは目撃していない点である。砲撃にさらされる船上で、彼の急激な不在を示すのは、周囲の下士卒の体に残る「脳漿肉片及び鮮血」であった。
　廣瀬の死は海軍によって広報されるとともに、マスメディアを通じて顕彰され、「軍神」という呼称とともに軍とメディアの双方から祀りあげられた。軍神としての広瀬像流通には、マスメディアの存在が大きくかかわっている。「軍神」を特集タイトルに掲げた『軍神広瀬中佐：日露戦争実記臨時増刊』では、次のように描写される。

（…）愕然我身を回視すれば、身に浴びたるは潮にあらで、是ぞ鬼中佐が忠義の血潮にして、形見と視るべきは、　我が外套に附着せる僅かに二銭銅貨大の肉片と鮮血班々たる地図を遺せるのみなりき。（…）中佐は部下の兵士に怪我あらせじと、身を以て艇内を掩ひ居たれば終に斯る壮烈無比の最期を遂げたるよしにて、満艇の壮なる永く戒衣（ゑい）の袖を湿（ぬら）すも道理（ことわり）ぞかし。（『軍神広瀬中佐：日露戦争実記臨時増刊』博文館、1904 年 4 月、75 頁）

　廣瀬は周囲の下士卒に「二銭銅貨大の肉片と鮮血班々たる地図」を遺して「壮烈無比の最期を遂げ」、すべての下士卒に涙を流させる。廣瀬の死の苛烈さを物語るのは肉と血の痕跡であり、痕跡しかのこっていないという事実である。身体に与えられる衝撃が、まさに衝撃的な語りを誘発し、またその語りが激しい描写を誘発する。
　こうした文体が、多くの兵士の「壮烈な死」に適用される。たとえば、中尉三浦容夫の死は、一発の弾丸で「粉微塵になつて八方へ飛散り、僅に残つたのが血に染つた剣の帯皮ばかり」（「実地通俗日露合戦記　46　中尉の惨死」『日露合戦記』3、大阪新報社、1904 年 5 月、42 頁）と語られることになる。

②　屍山血河の戦場
　こうした理想化された激しい死の描写は、逆説的に、死の平等をもたらしたと考えられる。軍神が迎えたような死が、個別に、しかし、戦場を覆い尽くすように万人に訪れる。戦場に残る肉と血、散乱する身体は、その戦闘の激しさとともに、苛烈な戦闘に身を投じた兵士たちの運命の、まさに痕跡としてとらえられるのである。こうした戦場の様子は、戦闘後の戦場を歩く第三者・観察者としての従軍記者の筆によって記述された。
　彼らの筆は、戦場の死の痕跡を、悲惨であり崇高でもあるものとしてロマン主義的に描写している。たとえば従軍記者田山花袋と従軍画家寺崎廣業・三浦北峡とは、砲弾に斃れた屍骸の血汐が流れる道を歩いた（田山花袋『第二軍従征日記』博文館、1905 年）。志賀重昂も「総じて爆薬に打たれ斃れたのであるより、頭部、腹部、足部などの嫌いなく、一面に焦げ爛れて肉と骨とがちぎれに」散乱する戦場に身を置き、「俵のごとく積み累れる死体の前に立ちて覚えずああと叫びつつ冷たき涙を三滴、四滴落した」という（志賀重昂『大役小志』博文館、1909 年）。従軍記者たちの報告は、それがどんなに理想化されていても、想像の余地のより少ない「真実」であるとして読者に受け止められた。

③　桜井忠温『肉弾』
　こうした戦場の「真実」、悲惨であり崇高な「真実」をもっとも近くで見ることができたのは誰か。兵士である。旅順攻略に参加し、重傷を負った中尉桜井忠温であった。彼は自身の体験をもとに『肉弾　旅順実戦記』を執筆し、戦後に出版した。『肉弾』は幾度か出版社を変えながらベストセラーとなり、1910（明治 43 年）には増補改訂版第 80 版が出版され、1928（昭和 3 年）には 1370 版を数えている。*Human Bullets* という英語版をはじめ、数カ国語にも翻訳された。
　読者がもとめたのは、戦場を体験した人物による、限りなく「真実」をとらえた「実戦」の描写であっと考えられる。桜井はたとえば、隘路に積み重なった同胞の身体が砲車の轍に寸断される様を「黒き腕、大きな脚、唇を噛み〆たる白き歯、死して尚ほ瞑せざる眼、半身の土中に埋もれたるもの、砕けたる骨、破れたる肉、流るゝ血、折れたる剣、裂けたる銃、これ等の相混じて散乱せる其状よ！」と筆写する。これは戦場における死の冷酷な現実の描写であるが、同時に詩的な表現でもあろう。

④　武士の戦
　こうした〈肉弾〉の様相を探ってゆくと、その描写に通底する戦いの思想として「武士の戦い」と「近代兵器の戦い」が想定される。
　日本古来の兵士像として武士のあり方を

説く「武士道」は、日露戦争において、全うすべき兵士の心得として受け入れられていた。ただし、この武士道は、明治時代以降にホブズボウムの提示した「創られた伝統」として形成されていた点が見られることには注意が必要である。また新渡戸稲造が *Bushido,The Soul of japan* をフィラデルフィアで出版したのは 1899 年であったが、同書は日本人の精神風土を考察するものであり、また日本語への翻訳は日露戦後の 1908（明治 41 年）を待たねばならない。

当時の人々にとっての「武士道」は、主に軍記物や合戦記といった物語の語り、すなわち講談や武者の錦絵を通して受容された部分が多いものと考えられる。講談や武者絵は、かたちを変えて、当時の新聞雑誌報道にも生き残っている。これは当時の拡大する読者層の好みを反映したものであろう。実際、日露戦争においては、森林黒猿、桃川実ら講談師が従軍を果している。こうした講談調の語りは、いきおい臨場感と壮烈さを強調してゆく。たとえば開戦直後の旅順口沖海戦における梶村文夫少尉候補生の戦死描写は、次のように当事者の台詞とともに語られる。

轟然たる響きと共に飛び来つたる敵の十二吋砲弾が虚空に於て爆発し、その破片が梶村君の臀部へ当つたから思はず一声　梶村『仕舞つたツ』と叫んだ、その声を傍らに居つた岡田少尉が聞つけ、振返つて見ると悲惨極るこの場の光景、梶村君は臀部から股、下腹へかけて、打貫かれ骨も肉もグザ／＼に崩れて（…）梶村『ヤ遣られたツ、残念、ロスキー』と血に染む両手を振て藻掻て居る、しかも傍らの鉄板へは飛散つた肉の塊がクツ附き、辺りはカラ最う一面の血潮で、実に二目とは見られぬ酸鼻の有様（…）（「実地通俗日露合戦記　39　悲惨の戦死」『日露合戦記』3、大阪新報社、1904 年 5 月 1 日、19 頁）

雑誌における武者絵風の挿図にも、血を流す身体の描写を確認することができる。たとえば彼らは捕虜になるよりは切腹を選ぶほうが潔いとされていたが、これは武士道的ふるまいとして賛美された。また、敵弾の飛び来るなかをものともせず進み、鬼神の如く戦う姿もまた良しとされていた。

⑤　近代戦

一方、こうした身を挺して戦う姿勢は、圧倒的な重量と破壊力を持つ兵器によって、敵味方を問わず多くの身体が物理的に破壊される結果を生じさせる。先に従軍記者たちが観察した、戦後の惨状がそれである。因果関係としては、死をいとわない武士的ふるまいの結果、避けられ得ない近代兵器の鉄槌を受けることとなる。

この兵器は、運動力（速度）と破壊力（エネルギー）にすぐれていればいるほど、戦争の近代性を際立たせる。『肉弾』において著者桜井は、「汽車弾」という言葉を紹介している。

予等は敵の砲弾を『汽車弾』と唱へてゐた。恰も汽車が煤煙を吐いて、ステーシヨンを出る時と同じやうな唸声をしたからで、近く此唸声が聞えると、間も無く大地は撼ぎ、凄じき響の内に、人も、馬も、岩も、砂も、皆粉々に砕かれて巻き揚げられる。乃ち此の汽車と衝突したものは、何一つ余すところ無く潰し込まれるのであつた。而して其破片は一たび落ちて又た跳ね上がり、自由自在に駆け廻つてゐるものゝやうであつた。曾て何某小隊長は、弾片に首をカチリと切られて、僅かに皮一枚でブラ下がつてゐた。（桜井忠温『肉弾　旅順実戦記』英文新詩社、1906、208 頁）

ここに見られるように、彼らの生命は「汽車」の名を冠した弾丸によって、瞬時に容易に刈り取られうる。あたかも汽車が人の体を粉々に轢死させるようである。これは、ヴォルフガング・シヴェルブシュが『鉄道旅行の歴史』で論じた近代の「衝撃（ショック）」、すなわち「人工的、機械的に、つくられた運動ないし状態の継続を打ち破る、あの突然の烈しい暴力事件、ならびにこれに続いて起こる破壊の状態」（ヴォルフガング・シヴェルブシュ著、加藤二郎訳「鉄道事故、鉄道性脊柱、外傷性ノイローゼ　余談―ショックの歴史」『鉄道旅行の歴史―19 世紀における空間と時間の工業化』法政大学出版局、1982 年、195 頁）に他ならない。身体に加えられる瞬時の「衝撃」こそが、戦争の近代性をありありと伝えるものとなる。

しかしこうした近代兵器は、敵から味方へ一方的に向けられるものではない。むしろ、味方の手のうちにもあって、大いなる戦果をあげつつあるものである。近代兵器の危機にさらされながらも、同じ兵器を使いこなし、西洋の大きな国と戦い勝利をおさめる姿こそが、日露戦争における近代的な日本のイメージに不可欠なものであった。

⑥　国民の身体として

破壊された兵士の身体は、英雄的武士と近代戦の二つの語りの交点に横たわっている。肉が破れ血が流れる描写は、古来の英雄的なものとして戦場での死を平等に賞揚し、その傷ついた身体を近代的な所産にした。本発表であつかった〈肉弾〉描写は、身体と死にまつわる強力なイメージとして強烈な磁場を発することとなったのである。これらのイメージは、マス・メディア上で展開した。日露戦争においては、それらのイメージを通じて、戦争の「真実」が人々の前に立ち現れたともいえよう。このイメージは、死すべき身体を持つ兵士を規定するとともに、その兵士を送り出し死を受け止める国内の人々の意識を、古くからの伝統を持ち、近代的な戦争を遂行し、ゆくゆくは勝利するであろう日本とその

国民像へと束ねていったのである。
　このイメージは 20 世紀初頭の日本という時期と場所ならではの背景を持つが、のちの昭和期における「肉弾三勇士」や今日の日露戦争観にいたるまで及んでいると考えられる。しかし〈肉弾〉という言葉が使用され続ける一方で、血や肉の描写は少なくなっていった。日露戦争当時『戦時画報』に連載していた矢野龍渓は、編集部へ「戦争画に於ては、余り血を画かぬこと」を要望している（矢野龍渓述「出鱈目の記」『戦時画報』31、近事画報社、1904 年 12 月 10 日、4 頁）。矢野は「進歩した」西洋のひそみにならい、血を多く描くことを「下品」と指摘する。こうした指摘は、日露戦後の芸術観のみならず身体観においても重要である。〈肉弾〉はこの後、その直前の突撃する英姿と、肖像的なモニュメンタルな雄姿とは表象されるが、まさに血と肉が砕ける瞬間の描写が減じてゆく。〈肉弾〉は賞揚されるが、見えなくなる。この変遷は、日本が西洋化を果してゆく道筋にそっておこってゆくものと考えられるが、その考察は今後の課題としたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　１　件）
① 向後恵里子「写される戦場　―日露戦争画報雑誌における石版･写真銅版印刷による「版の画」をめぐって」『近代画説』第 22 号（明治美術学会）、2013 年 12 月、80-93 頁。

〔学会発表〕（計　５　件）
① 向後恵里子、早稲田 表象・メディア論学会第 8 回研究発表会トーク・セッション「明治期〈写-真〉事情放談」企画、基調トーク「明治の〈写-真〉-イメージのなかの“ リアル ”」（早稲田大学）2013 年 11 月。
② 向後恵里子「肉弾：日露戦争における戦傷兵士のイメージ」研究会「戦争の記憶を比較する：ロシア、日本、アジア」（国際交流基金モスクワ日本文化センター）（科研「社会主義文化における戦争のメモリー・スケープ研究―旧ソ連・中国・ベトナム」研究課題番号 25283001）、2013 年 9 月。
③ 向後恵里子, *Human Bullets: Images of the wounded soldiers in the Russo-Japanese war*, Fifth East Asian Conference on Slavic-Eurasian Studies（大阪経済法科大学）, 2013 年 8 月。
④ 向後恵里子「掌上の帝国-日露戦争期における絵葉書」シンポジウム 近代アジアをめぐる絵はがきメディア―帝国・表象・ネットワーク（国際日本文化研究センター）、2012 年 11 月。
⑤ 向後恵里子「肉弾　-日露戦争における戦死の表象」戦争のメモリー・スケープ研究会（北海道大学）、2012 年 7 月。

６．研究組織
(1)研究代表者
向後　恵里子（Kogo, Eriko）
早稲田大学文学学術院・助教
研究者番号：80454015